

メランコリーと初期リビード経済論

——フロイト草稿 G「メランコリー」のリビード論的意義——

松 山 あゆみ

京都大学大学院 人間・環境学研究科 共生人間学専攻
〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町

要旨 ジークムント・フロイト (1856-1939) の初期の草稿である「心理学草案」(1950 [1895]) は再評価されているが、それに対し、その他の初期の草稿には、いまだ十分な光があてられておらず、正確な読解すらほとんどなされていない。本稿では、メランコリーというテーマに着目し、晦渋な初期草稿のうちの一つ、草稿 G「メランコリー」(1895) を取り上げる。フロイトがメランコリーを主題として扱ったのは、この草稿以外には、メタサイコロジー諸編の一論稿「喪とメランコリー」(1917 [1915]) だけである。両者には約 20 年もの歳月の隔たりがあるにもかかわらず、リビード経済論的見地から両者を比較してみれば、メランコリーに対するその基本的見解はほとんど一致している。これを明らかにすることにより、精神分析理論に対する草稿 G のリビード論的意義を見出すことが本稿の狙いである。

序

ジークムント・フロイト (1856-1939) の初期の草稿「心理学草案¹⁾」(1950 [1895]) が再評価されて久しいが²⁾、現在でもなおこの草稿は見直され続けている³⁾。それに対して、管見の限りではあるが、その他の初期の草稿には、いまだ十分な光があてられておらず、それらの草稿は、再評価の対象になるどころか、正確な読解すらほとんどなされていない。

本稿では、メランコリーというテーマに着目し、これらの草稿のうち、とくに草稿 G⁴⁾「メランコリー」(1895) を取り上げる。フロイトがメランコリーを主題として扱っているのは、草稿 G とその約 20 年後に発表された論稿「喪とメランコリー⁵⁾」(1917 [1915]) の二つだけである。「喪とメランコリー」は、1915 年頃に連続して書き上げられたメタサイコロジー諸編の一論文であり、精神分析理論にとって重要な位置を占めている。というのも、これら「一連の諸論文の意図は、精神分析体系の基礎となりうる理論的仮説を解明し、深めること⁶⁾」だとフロイトが明言しているから

である。また、この論稿には、メランコリーの考察を通して、その理論に欠くことのできない諸概念の形成や発展の兆しが見られる。たとえばそれらの概念は「同一化」「ナルシシズム」「サディズム」「批判的審級」などである。以上のことから論稿「喪とメランコリー」はフロイトの精神分析理論にとって不可欠なものだと言えよう。そしてこの論稿におけるメランコリーの考察の原点となっているのが本稿で扱う草稿 G である。

草稿 G が書かれた 1895 年という年は、フロイトがヨーゼフ・ブロイアー (1842-1925) との共著『ヒステリー研究⁷⁾』を出版し、当時の親友ヴィルヘルム・フリース (1858-1928) への手紙において体系的な自己分析を始めた年である。1895 年前後に書かれた手紙には神経学的な用語がまだまだ多く見られるものの、この時期は精神分析の萌芽期に当たると言えるだろう⁸⁾。このように時期的に見ても重要だと思われる草稿だが、この草稿を、フロイト全集の標準版英訳という偉業を成し遂げたジェームズ・ストレイチ (1887-1967) は、その全集の中に収められた論稿「喪とメランコリー」の解題において以下のように評した。

フロイトは、純粋に神経学的な用語においてメランコリー（この用語に、フロイトはいっつも決まって、今日ではふつう抑うつ状態と記述されるものを含めていた）を詳細に説明することを試み、それをフリースに送った（フロイト、1950a, 草稿 G）。

この試みはとくに実り多きものではなかったが、それはまもなく心理学的にこの主題に着手する試みに取って代わられた⁹⁾。（括弧内原著、傍点筆者）

ストレイチの言う「とくに実り多きものではなかった」とは、どのような意味だろうか。おそらくその意味は、フロイトのメタサイコロジーにとって、さらには精神分析にとって「とくに実り多きものではなかった」ということだろう。確かに草稿 G では、先に挙げた「同一化」「ナルシズム」「サディズム」「批判的審級」等の精神分析の諸概念に発展するような概念の記述はなく、ストレイチの言うように、この草稿がその後のメタサイコロジーに大きく寄与したということはない。

しかも、論稿「喪とメランコリー」では、メランコリーは、ナルシスの疾患という精神病に類するものとして捉えられているのに対し、草稿 G では、神経衰弱や不安神経症と同じく神経症として扱われている。このように疾病分類においても両者にはずいぶんと相違がある。

しかしながらそれにもかかわらず、本稿で以下に詳述するように、リビード経済論的見地に立てば¹⁰⁾、草稿 G と論稿「喪とメランコリー」との記述はほぼ一致し、その基本理論は何ら変更されていないことが読み取れる。この意味において草稿 G を考察することは、決して無益なことではないだろう。

ただし、この考察は容易ではない。この草稿は次のような理由により読解困難なものだからである。この草稿は、「心理学草案」や他の草稿と同様、フリースという親友に送られたものであり、友人同士で理解できる程度のもの（略字や箇条書きを含むもの）として書かれているに過ぎない。したがって、これを読解するためには、この草稿と同時期のフロイトの理論とその理論に多大な影

響を及ぼしたブロイアーの理論の理解、およびこの時期にフリースに宛てられた手紙の大きなコンテキストの理解が必要となる。本稿では、これらの理論にも手紙にも目を配りつつ、草稿 G の読解に努め、論稿「喪とメランコリー」との比較により、まずはメランコリーの疾病分類における両者の差異を浮き彫りにする。そして次に、草稿 G で論じられるメランコリーの機制に関わるリビード論を追う。さらに両者の疾病分類の差異にもかかわらず、メランコリーに対するフロイトの首尾一貫したリビード経済論を明らかにし、草稿 G における初期リビード経済論の意義を見出すことを目指す。

1. メランコリーの疾病分類

フロイトはその初期から後期の理論に至るまで、メランコリーという疾患を神経症と精神病のどちらに分類すべきか揺れ動き続けた。草稿 G と論稿「喪とメランコリー」との比較においてもその一端をうかがうことができる。

草稿 G は短いながらも VI 章立てになっており、I においてはフロイトがメランコリーについて収集した「事実」が列挙されている。そこでは、「メランコリーと不感症（Anästhesie）には際立った関係がある」ことや、「メランコリーがマスターベーションによる神経衰弱の増悪の結果生じる」こと、「メランコリーが典型的に激しい不安と結びついて起こる」こと等々が挙げられている¹¹⁾。

ここにおいて問題となることは、メランコリーが性的満足を得られない不感症と関係付けられていること、神経衰弱の延長線上に置かれていること、そして不安と結び付けられていることである。このことからだけでもメランコリーが神経症と見なされていることが読み取れるが、より確実性を持たせるために、この草稿の前年に書かれたのではないかと推定されている草稿 D と E を取り上げてそれを検証することにしよう。

フリース書簡や 1895 年前後の論稿からうかがえることだが、フロイトはこの頃、疾病分類に夢中になっていた。これらの草稿でも疾病分類がな

されており、メランコリーもその分類の対象となっている。

まず草稿 D においては、神経衰弱や不安神経症、強迫神経症、ヒステリーにメランコリーが並べられている¹²⁾。そして草稿 E においては、メランコリーが神経衰弱と類似性があるものであり、不安神経症の対となるものだとしている¹³⁾。これらの草稿からフロイトがこの頃メランコリーを神経症として捉えていたということが明らかになる。

また、草稿 G が書かれてからほどなくしてフロイトは、これらを包括するような二つの大きな分類を考えついた。その分類のうちの一つは、現在の性生活における性的満足 of 欠乏によって引き起こされる現勢神経症 (Aktualneurose) であり、もう一つは、性生活に関連した幼児期の体験の中にその原因が見出される神経精神症 (Neuro-psychose) である。フロイトは、神経衰弱および不安神経症を現勢神経症に分類した¹⁴⁾。

この分類の対象としてメランコリーは取り上げられていないが、草稿 D、E、G の記述に基づけば、メランコリーが現勢神経症か神経精神症のどちらに分類されるかは明白なものとなる。メランコリーは、草稿 D および E では、神経衰弱と不安神経症と並べられ、草稿 G においては神経衰弱の延長線上に位置づけられている。さらにそれは不感症、すなわち現在の性生活における性的満足 of 欠乏とのかかわりが大きいものだとしている。これらのことに照らしてみると、メランコリーは現勢神経症に分類されるべきものだと考えられる。このようにフロイトがこの時期、メランコリーを神経症として扱っていたことは疑いの余地がない。

しかしそれに対して、草稿 G の約 20 年後の論稿「喪とメランコリー」では、メランコリーは、転移神経症と対照をなすナルシスの疾患 (narzisstische Affektionen) として、精神病に類する枠組みのなかで捉え直されている。これは、精神分析におけるナルシズム概念の導入によりなされた新たな分類だと考えられる。

フロイトは、この論稿においてはメランコリーを他の疾患と比較していないが、この論稿が書か

れた時期と同時期にウィーン大学で行った『精神分析入門講義』の神経症総論の第 26 講「リビッド理論とナルシズム」では、パラノイア、早発性痴呆、メランコリーがナルシスの神経症 (narzisstische Neurose) という名の下にまとめられて、その病の機制が論じられている¹⁵⁾。パラノイアについては、1911 年の論稿「自伝的に記述されたパラノイア (妄想性痴呆) の一症例に関する精神分析的考察」で詳細に論じられており、そこではまた早発性痴呆も取り上げられているが、両者ともに精神病として扱われている¹⁶⁾。さらに、先に触れた「リビッド理論とナルシズム」においても両者が精神病として捉えられていることが読み取れることから、ここでナルシスの神経症と呼ばれているものは、神経症と名付けられていようとも、その内実は精神病と重なるものだと考えることができるだろう。

この疾患の機制は、当然のことながらナルシズム概念によって説明がなされる。ナルシズムの状態とは外界に対象を見出すことがまだできていない原初的な状態のことであり、この状態においてはリビッドが自我に格納 (Unterbringung) されたままである。これは一次的で正常なナルシズムであり、このような状態から人間は成長して外界に対象を発見し、その対象にリビッドを向けることになる。もし対象との間に何らかの葛藤が生じると、リビッドは対象から無理に引き離され自我へすべて引き戻される。そして一次的ナルシズムに退行した状態が生まれる。これは病的な状態を指しているのだが、これをフロイトは「二次的ナルシズム」と呼んだ¹⁷⁾。

ナルシスの神経症の機制は、すなわち、リビッドが一次的ナルシズムへ退行し、二次的ナルシズムの状態に陥ることだと言えよう。このような状態を論稿「喪とメランコリー」で、以下のようにフロイトは言い表している。「このような同一化による対象愛の代理は、ナルシスの疾患にとって重要な機制である…… (中略)。これは、対象選択の一つの型から根源的なナルシズムへの退行と一致する¹⁸⁾」。このように論稿「喪とメランコリー」においては、草稿 G で捉えられてきたような神経症の枠組みとは違う新たな枠組み、

すなわち、精神病に類するナルシスの神経症としてメランコリーが捉え直されていることが明らかになった。

さらに1920年代に入ると、超自我とエスという心的審級の概念が導入され、また新たな疾病分類がなされる。それは1924年の論稿「神経症と精神病」でなされた分類である。その分類は、自我とエスとの葛藤の結果生じる神経症と、自我と外界との葛藤の結果生じる精神病という分類である。しかしながらメランコリーは、このどちらにも属さない、あるいはどちらにも属していると言えるかもしれない¹⁹⁾、自我と超自我との葛藤により生じるナルシスの精神神経症(narzisstische Psychoneurose)という複雑な位置を占めることになる²⁰⁾。

以上、見てきたように、メランコリーは、1895年には神経症、1917年には精神病に類するナルシスの神経症、1924年には神経症とも精神病ともはっきりと言えないようなナルシスの精神神経症として位置付けられてきた。このようにフロイトはメランコリーの疾病分類に悩まされ続けてきたわけだが、草稿Gが書かれた時期にはメランコリーは神経症とされ、「喪とメランコリー」が上梓された時期には精神病に類するものとされ、両者には明確な相違がある。にもかかわらず、両者において展開されるリビード経済論的なメランコリーの機制的説明はほぼ一致しているように見える。以下では、そのことを検証する前に、まずは草稿Gにおけるリビード論を明らかにするために、リビードに関する記述を追っていくことにする。

2. メランコリーの公式

フロイトは草稿GのIで臨床から得た所見を「事実」として列挙したが、IIでは、これらを材料としてメランコリー論を構築するため、ある公式を立てている。それは次のようなものであった²¹⁾。

- a. メランコリーに対応する情動は、喪に対応する情動、すなわち喪失した何かへの

憧憬(Sehnsucht)である。ゆえにメランコリーには、ある喪失、詳しく言うと、欲動生活(Triebleben)における喪失が関わっているだろう。

- b. メランコリーと同一方向の食事神経症は食欲不振症である。若い娘によく見られる神経性食欲不振症は、よく観察した結果によると、未発達な性におけるメランコリーだと思われる。患者は、単に食欲がなかっただけで他に何の理由もないと訴えた。

食欲喪失=性生活におけるリビードの喪失

それゆえ、メランコリーの本質は、リビードの喪失についての喪にあるという考えから出発するのも悪くないだろう²²⁾。
(傍点原著)

ここで注目すべき点は、フロイトがこれらの公式において、「喪」と「メランコリー」とを並べて用い、この対比から考察を始めようとしている点である。1917年の論稿「喪とメランコリー」においても、喪とメランコリーとの比較からフロイトは考察を始めている。両者にはおよそ20年もの年月の隔たりがあるが、喪とメランコリーの比較からメランコリーの本質を炙り出すというフロイトの基本路線の一貫性がこの公式から垣間見ることができる。また、喪とメランコリーとの比較を試みたのは、双方の特徴的な状態(ひどく苦痛を感じる不機嫌さ、外界に対する関心の喪失、愛する能力の喪失、あらゆる行動の制止)の類似性にフロイトが着目したためだと思われる。

そしてこれらの公式において、喪とメランコリーとをつないでいるのが「リビード」である。リビードという語は、これまで何の説明もなしに本稿で取り上げてきたが、フロイトの公刊された論稿の中では「ある特定の症状複合を『不安神経症』として神経衰弱状態から分離することの妥当性について」(1895 [1894])が初出であり²³⁾、フリースに送られた草稿では草稿E²⁴⁾とF²⁵⁾において用いられている。いずれにおいてもその語の定義ははっきりとは与えられていないが、それは

後の精神分析理論に対する多くの示唆を含んでいる。それゆえ、それらの草稿および論稿におけるリビッドに関する記述を概観することにしよう。

外因性興奮 (exogene Erregung) の場合、その興奮の源泉は外部にあり、その興奮の増大は心的なもの (心的領域) のなかに伝えられる。そしてこの興奮の増大はその量に応じて処理されるが、そのためには内部の心的興奮を同じ量だけ減少させる反応がなされるとよい。それに対し、内因性興奮 (endogene Erregung)、すなわち飢え、渇き、性欲動 (Sexualtrieb) というものは、連続的ないしは不連続的に亢進するが、それがある閾 (Schwelle) に達したときに初めて気づかれるものである。それは、この閾を越えて初めて心的に利用され、特定の表象群と関係するようになる。そしてこの表象群が特異的反応 (たとえば性欲動なら性交) によって、緊張の除去を行う。つまり、身体的性的緊張は一定の値を超えると、心的リビッドを呼び起こし、これが性交などを実行に移すのである。この特異的反応が起こらないと、身体的一心的緊張 (physisch-psychische Spannung) は亢進し続けて障害となる²⁶⁾。たとえば、心的リビッドが亢進しているのに、ポテンツが減退するような老年期には不安神経症になりやすい²⁷⁾。

身体的一心的緊張とはつまり性的情動のことであり、性的情動に関しては、1895年の『ヒステリー研究』初版のプロイアーの理論部において以下のように論じられている。性は、思春期には、目標のない不確かな漠然とした興奮亢進として現れる。この内因性興奮は生殖腺の機能によって条件付けられている。そしてそれは、正常な場合、さらに発達すると、異性を知覚したり表象したりすることと結びつく。これは特定の個人を表象し、その人に恋着する (verlieben) という現象である。この表象は性欲動によって自由にされたすべての興奮量を所有する。これは「情動を伴った表象」 (affektive Vorstellung) となり、この表象が意識において活性化する際に、生殖腺という本来は別の源泉に由来する興奮を亢進させる。このように内因性の興奮亢進から狭義の心的情動への移行は、性的興奮や性的情動を形作る²⁸⁾。

以上のことからわかることは、フロイトがリ

ビッドを内因性の緊張 (興奮)、とりわけ「性欲動」と見なしているということである。さらに「身体的一心的緊張」は、「喪とメランコリー」もそのなかの一論文であるメタサイコロジー諸編、その導入部に当たる論稿「欲動と欲動運命」(1915)における次の記述と合致する。すなわち「欲動は心的なものと身体的なものとの境界概念だと思われる²⁹⁾」という記述である。後の精神分析理論における「リビッド」および「欲動」の原型がすでにここに形作られているということが読み取れる。

IIの公式からこのようなことが読み取れたわけだが、これらの公式のなかでも最も重要であるのは、「メランコリーの本質は、リビッドの喪失についての喪にある」というものである。この公式がメランコリーの発症と特性を説明するものとなりうるかどうかを、フロイトは、自身が講義などでしばしば用いたとされる性図式³⁰⁾ (Sexual-schema) にしたがってIIIにおいて論じている。さらに、IIIで論述されたような役割を不感症がメランコリーにおいて果たすということは、どのようにして起こるのか、ということが引き続きIVで解説されている。ここで言う「リビッドの喪失」とは、いったいどのようなものなのか、以下で見ていくことにしよう。

3. メランコリーの発症と特性

まずIIIとIVの全体を通して言えることは、「心的性群 (psychische Sex[ual]gruppe, ps. S.)」がその興奮量を失って弱められるということが、メランコリーの発症につながるということである。心的性群とは「心的な性的表象の複合体」のことであり、個々人の性的な思い出にまつわる表象群、たとえば口づけや愛撫などの個々の表象の集まったものであると考えられる。これらの表象は情動と結び付けられて活性化され連想が起こる³¹⁾。情動の強さが興奮量およびリビッドと同義だと言えるだろう。そしてこの心的性群が興奮量つまりリビッドを失って弱化するとメランコリーになるというIIIおよびIVにおける見解は、IIの公式「メランコリーの本質は、リビッドの喪失についての喪にある」に合致する。よってフロイトは、

この公式がメランコリーの発症と特性を説明できているということを、III、IVにおいて明示できたわけである。

IIIとIVの個々の内容に入ると、そこでは、マスターベーション、中断性交、防衛によって生じるメランコリーが挙げられている。まず見るべき点はマスターベーションによるメランコリーである。IIIでは、身体的性的興奮の生産の低下あるいは中止という状態が、過度のマスターベーションによる不感症が促進する神経衰弱性メランコリーの特徴だとされている。この特徴に、過度のマスターベーションによって、身体的性的興奮が永続的に貧困化するということが付け加えられている³²⁾。これに対する説明として挙げられているのは、過度のマスターベーションは終末器官の過度の負荷軽減に至り、それとともに終末器官における低い刺激水準に至るというものである³³⁾。この説明を草稿Eの記述をもとにして言い換えるところなる。マスターベーションを繰り返すことにより、緊張欠如に対する慣れが生じ、終末器官、すなわち性器の刺激水準が低められ、それは身体的緊張の蓄積に耐えられなくなる³⁴⁾。低い刺激水準が保たれるということは、リビードが心的性群に伝わらないということである。そしてその分、快楽感覚も小さくなり、心的性群は弱められていく。このようにしてマスターベーションによる不感症が神経衰弱性メランコリーの原因となり、それをさらに促進させると考えられる。

IVにおいてマスターベーションと並べられているのが、中断性交であるが、これは、草稿Eと照らし合わせてみると、神経衰弱性のメランコリーの原因ではなく、不安メランコリーの原因である。中断性交³⁵⁾とは、性的満足を得る前に性交を中断することである。女性においては、体外射精の際や男性の早漏の際、満足を得る前に性交が中断される。中断性交の際の女性においておこる機制はいたって単純である。その機制とは次のようなものである。

まず前提として以下のことが挙げられる。身体的性的興奮はある閾を越えないと心的性群と関係を持つことができないということ、そしてこのような外因性の興奮が生じた分だけ内因性の興奮量

は処理されねばならないということである。これらの前提の下、中断性交の場合を考えてみると次のようになる。女性身体的性的興奮が豊富に発生しながらも、ある閾を越え出る手前で人為的に疎隔され、すなわち、男性によって中断されてしまい、快楽感覚は心的性群に伝えられない。その一方で自発的に亢進された内因性緊張は満足が得られないで処理されないために、この緊張は不安に変わる。なぜ、不安か。不安は、呼吸という行為以外にはその心的処理がなされない刺激の蓄積の感覚であり、それゆえ蓄積された身体的緊張一般に用いられるものだからである³⁶⁾。

以上の機制はIIIにおける「身体的性的興奮の生産は減少していないのに、性的緊張が心的性群からそらされる場合」および「身体的性的興奮が、他の所（境界）で使用されるのを前提としており、このことが不安の条件となる」という記述に合致しているので³⁷⁾、このことから中断性交が不安メランコリーの原因となり、さらにそれを促進することがわかるだろう。不安メランコリーは、蓄積された興奮量つまりリビードが、心的性群に伝えられず、不安へと変わり、心的性群が結局は弱められることによって発生するのである。

最後にIVにおけるヒステリー性不感症に関する記述を見ると、そこには、「下のほうはすべて正常であるが、快楽感覚が、ただ他の所への結びつき（嫌悪感との結びつき——防衛）のせいで心的性群への進入が妨げられる³⁸⁾」と記されている。ここで言われていることは、「下のほうはすべて正常」で、つまり性器の器質的疾患はないのだが、防衛という働きによって快楽感覚は心的性群から他へそらされるということである。では、防衛による他の所への結びつきとはいったいどういうことだろうか。

「防衛」という概念は、フロイトの後期の理論において再び重要な意味を持つようになる概念であるが³⁹⁾、ここでは、当然のことながら草稿Gが書かれた時期の概念に注目せねばならない。この時期にフロイトが防衛という概念を中心に論じているのは、「防衛—神経精神症」(1894)である。

「防衛—神経精神症」(1894)においてフロイトは、性生活が「相容れない表象を生み出す最大の

誘因⁴⁰⁾」だと言ったが、それは、フロイトの観察によると、このような事態が生じる源泉が性生活にあり、性生活が強迫表象と結びついている情動と同じ性質の苦痛の情動を与えているからである。防衛という働きによって、こういった受け入れられない性的表象は抑圧される。本来ならば、身体的性的興奮が亢進し、ある閾を越えるとリビドが呼び起こされ、心的性群のなかの性的表象と結びつき、性的情動が引き起こされねばならないのだが、防衛によってそれは不可能となる。それゆえ、その性的表象はその情動とは結びつかず、この情動はこれにふさわしくて相容れなくはない表象 (*passende, aber nicht unverträgliche Vorstellung*) に結び付けられるのである⁴¹⁾。

こうした論を踏まえると、IVで取り上げられていたヒステリー性不感症においては、嫌悪感との誤った結びつきがなされてしまうと読み取ることができる。そしてヒステリー性食欲不振症における場合は、フロイトの論に従えば、性的嫌悪と食に対する嫌悪とが誤った結びつきをなすと考えられる。このように「誤った結びつき」によって別の表象に結び付けられた情動だが、結局のところ、この情動はただたんに置き換えられた (*transponiert*) だけであるので、変化することも弱まることもなくそのまま自我を苦しめることになる。そしてもともとこの情動と結びついていた相容れない表象のほうは押さえつけられ (*niedergehalten*)、想起から排除される (*ausgeschlossen*) のである⁴²⁾。

フロイトはさらに防衛に対する考察を深め、「絶えず新たにやってくる性的表象に対する継続した防衛⁴³⁾」というものも見出したのだが、この防衛はとくにここにおけるヒステリー性不感症に当てはまるように思われる。不感症に女性になりやすい理由はVにおいて説明されるが、このような女性においては結婚生活における性的な営みに対する防衛作業が終わりに達することなく継続される。こうした防衛によって、心的性群にその興奮は伝わるのがなくなり、その興奮量が失われ、それは弱められていくことになる。つまり、リビドがどんどん失われていくということである。このようなすべての変化は心的領域内にとど

まっているので、心的興奮と身体上の神経支配との関係は変化を被らない⁴⁴⁾。ヒステリー性不感症においては、「下のほうはすべて正常」であるのはこのためではないだろうか。

ここにおいて注目すべき点は、こうした心的事象は意識することなしに生じるようだというところに⁴⁵⁾、つまり無意識的なものと関わっているということに、フロイトはすでにこの時点で目を向け始めていたという点である。それゆえにこの防衛という概念は、先に触れたようにフロイトにとって後々まで重要なものとなる。以上でヒステリー性不感症がメランコリーを発症させ、促進させる過程の説明を終えることにする。

これまでIII、IVの記述に定位して、マスターベーション、中断性交、防衛によって生じるメランコリーを見てきたが、いずれの場合にも、メランコリーの本質はリビドの喪失にその原因があるということが明らかである。IIの公式の妥当性はIII、IVにおいて十分に示されたわけである。

4. 女性が不感症になる理由

以上において、不感症がリビドの喪失を引き起こし、メランコリーの発症に果たす役割を確認した。不感症はその特徴から言えることだが、男性よりも女性になりやすい。その理由をフロイトはVにおいて挙げている。以下にその重要な部分を引用する。

不感症は女性に多い特性だが、これは女性の受動的な役割に原因がある。

不感症の男性は性交しようとしなければよいが、女性はそういうわけにはいかない。

女性が容易に不感症になる理由は以下の通りである。

1. 普通ならすべての興奮が心的刺激に変わることが可能である。すなわち点線の経路⁴⁶⁾を性対象から完全に心的性群に向けることが可能である。しかし、教育全体は、こういった身体的性的興奮を呼び起こさないことを目指すのである。

このようなことが必要である理由を以下に

挙げる。

身体的性的興奮が活発な場合、やがて心的性群が間欠的に強められて、女性も男性の場合と同じように特異的反応によって性対象を有利な位置へ持ってくるだろうからである。ところが女性の特異的反応の弧が脱落するように求められる。その代わりに男性を特異行為に誘う永続的な特異行為が求められる。このように、性的緊張は低く保たれ、心的性群へのその流入はできる限り遮断される。そして、心的性群に必要な強さは他の方法で賄われるのである。こうして今や心的性群が憧憬の状態になると、この状態は、終末器官における緊張の水準が低いときに簡単にメランコリーに変化する。……（中略）。

2. 女性は頻繁に愛情なしに、すなわち、わずかな身体的性的興奮と終末器官の緊張を持って、性的行為へ進み、結婚する。すると彼女たちは冷感症となり、そうあり続ける。終末器官における緊張が低水準であるということはメランコリーに対して主要な素因を含んでいると思われる。このような人々においてはあらゆる神経症が容易にメランコリーの刻印を得る。それゆえ性的能力のある人々は容易に不安神経症になるのに対して、性的不能の人々はメランコリーになる傾向がある⁴⁷⁾。

まず1で述べられていることは、端的に言うところ、教育が女性を不感症に陥らせる原因になりやすいということである。教育が女性の純潔を高らかに謳い、幼児期からこうしたことを擦り込むと、女性は葛藤⁴⁸⁾に陥るか、あるいは憧憬を生じさせる。もしこうした教育が施されていないならば、女性も男性と同じく、「特異的反応によって性対象を有利な位置へ持ってくる」。すなわち、それは女性のほうから性行為に及ぶということである。しかしながら、教育によると、それははしたないことであるから、このような性欲動は押さえつけられ、その代わりに「憧憬」を生み出す。この憧憬がメランコリーにおける鍵概念となる。

たとえば、草稿Eには、メランコリー患者は不感症であることが多く、性交への欲求も性交による感覚も持っていないが、心的形態における愛への強い憧憬を抱いていると記されている⁴⁹⁾。その意味するところは、患者において防衛が働いているので、患者は意識の上では性的な欲求も感覚も持っていないということであり、無意識においてはその強い欲求を持っているということだと考えられる。ここでフロイトは、この憧憬のことを「心的な愛の緊張」と呼び、これが蓄積され満たされないままだとメランコリーが発症すると述べている⁵⁰⁾。

「心的な愛の緊張」とは、『ヒステリー研究』（1895）においてプロイアーが詳細に論じている「脳内の緊張性興奮⁵¹⁾」のことだと考えられ、この興奮の不均等な高まりによって活動能力が害されメランコリーに陥ってしまう。より具体的に言うところ、有機体には脳内興奮を恒常的に保とうとする傾向があるので、不均等な興奮亢進が生じると、心的機能の特定の部分のみを亢進させることになり、その他の部分を制止させる。こうしてメランコリーが発症することになる⁵²⁾。

では、「憧憬」の状態に女性⁵³⁾はどのように陥るのであろうか。Vでは、「女性は特異的反応の弧が脱落するように求められる」、「性的緊張は低く保たれ、心的性群へのその流入はできる限り遮断される」と述べられている。これは、つまり、教育によって身体的性的興奮そのものが低く保たれるようにされ、それゆえ、心的性群にその興奮（リビード）が伝えられないということである。そうすると、心的性群は弱められていくのだが、「憧憬」という「心的な愛の緊張」によってそれを補おうとする。しかしながら、「心的な愛の緊張」は、上述したように、脳内の緊張性の興奮亢進のことであると考えられるので、不均等な興奮亢進が生じ、心的機能の特定の部分のみを亢進させ、その他の部分を制止させる。つまり、活動能力に障害を及ぼし、メランコリーに陥るのである。このことを、リビードを用いて言い換えると、心的性群からはリビードが失われていくのだが、他の部位にリビードが鬱滞し、障害を及ぼすということになる。

さて、次に2の記述だが、それは、IVの冷感症の描写と重なるものである。そこでは冷感症は、メランコリーの素因の兆候だとされていた。この場合、身体的性的興奮はもともと性的不能によって低い状態か、中止された状態につねにあることになり、心的性群はどんどん弱まっていく。つまりリビドが失われていくのである。この際に憧憬が上述の過程をたどって生じると、これらの人々はメランコリーになる。それゆえ、性的不能の人々はメランコリーになりやすいと考えられる。それに対し、性的能力のある人々においては、不安神経症になると、ここでは述べられているが、このような対比は以下のように草稿Eにおいてもすでになされていた。

身体的な性の緊張が蓄積されるところに——不安神経症。
 心的な性の緊張が蓄積されるところに——メランコリー⁵⁴⁾。(傍点筆者)

すなわち、不安神経症においては、性的能力があるので身体的性的興奮は十分に生産されるのだが、その興奮が性的表象に拘束されず、身体的な性の緊張が蓄積され、不安へと変わるということである。メランコリーにおいては、上述のような憧憬が生じるために心的な性の緊張が不均等に蓄積され、それが満たされないと、他の部分を制止させて活動能力に障害を及ぼす。すなわちリビドが鬱滞し、放散されないと、障害が生じるというわけである。

以上において女性が不感症になりやすい理由を、メランコリーにおける憧憬という鍵概念に注目しながら確認したが、以下で取り上げる最終章VIでは、神経学的な術語によるメランコリーの作用の説明が見られる。

5. 内的失血と傷と穴

草稿Gにおけるリビド(興奮量)の論述を追うためには、最終章VIでフロイトが試みているメランコリーの作用の説明を見ても必要がある。それは以下の通りである。

メランコリーの作用はどう説明されるか。最良の記述：欲動貧困化とそれについての苦痛とを伴う心的制止

心的性群が興奮量を著しく失うとき、いわば、心的なものにおける回収が生じ、これは、接し合っている興奮量を吸い上げるよう作用すると考えられる。連合したニューロンはその興奮を譲り渡さなければならないが、このことが苦痛を発生させる。連合の解消はつねに苦痛だからである。いわば内的失血によって興奮が貧困化し、他の欲動や行為に表れる自由な備蓄が貧困化する。この回収は、制止として、傷のように(身体的苦痛の理論を参照)苦痛と似た作用を及ぼす。これと対をなすものは、溢れ出る興奮がすべての連合したニューロンに伝達される躁病だろう。

ここにおいて神経衰弱との類似が明らかになる。

神経衰弱の場合には、まったく類似した貧困化が生じる。このことは、興奮がいわば穴を通して流れ出すことによって生じる。しかし、ここでは、身体的性的興奮が空になるまで汲み出される。メランコリーの場合には、その穴が心的なものにある。しかしながら、神経衰弱の貧困化は心的性群にまで広がりうる。見かけも本当によく似ているので、かなり多くの症例が入念に鑑別されなければならない⁵⁵⁾。(傍点、括弧内原著)

ここではまず、メランコリーの作用として「欲動貧困化とそれについての苦痛とを伴う心的制止」が挙げられており、その内容の説明が続いてなされている。「心的性群が興奮量を著しく失うとき」とはいかなるときであろうか。それは、IIIおよびIVですでに確認してきたことである。すなわち、身体的性的興奮の生産が不十分であるか、または中止されているとき、もしくは、身体的性的興奮が他の場所へそらされてしまうときである。

このとき、心的性群はその興奮量(リビド)を失い弱化する。弱化した心的性群は、上述のように「接し合っている興奮量を吸い上げる⁵⁶⁾」。

これをフロイトは「心的なものにおける回収」と呼んでいるが、この回収によりニューロンの連合は解消され、苦痛を引き起こす。連合の解消は「内的失血」にたとえられ、このような失血によって「興奮が貧困化し、他の欲動や行為に表れる自由な備蓄が貧困化する」。

フロイトの「心理学草案」のニューロンに関する記述を踏まえて考察すると、この自由な備蓄とは、内因性刺激（体細胞から生じ、空腹、呼吸、性欲などの大きな欲求を引き起こす刺激）に対して、この刺激から生じる欲求を満たす特異行為の達成のために貯蔵されている興奮量のことである⁵⁷⁾。このような生命活動のための必要最低限の備蓄までが、「内的失血」によってできた「傷」を治すために、心的性群に吸い上げられてしまう。

このようにして、心的領域の「傷」や「穴」と言い表されている部分に「心的な性の緊張」が蓄積され⁵⁸⁾、心的制止が生じる。より具体的に言うと、「有機体には脳内興奮を恒常的に保とうとする傾向」があるので、「傷」や「穴」に集中して不均等な興奮亢進が生じると、心的機能の特定の部分のみを亢進させることになり、その他の部分を制止させるということである。制止とはすなわち、心的領域の傷口以外の部分が貧困化し、空になるということだと考えられる。これがメランコリーの作用である。この作用は当然のことながら、IIの公式「メランコリーの本質は、リビードの喪失についての喪にある」に当てはまる。

6. 草稿 G と論稿「喪とメランコリー」 との比較

以上で草稿 G のリビードに関する論述を終え、本稿における最後の考察として、草稿 G と論稿「喪とメランコリー」との比較を試みたい。両者をリビード経済論の見地から比較することにより、フロイトが草稿 G で論じたメランコリーの機制に関わるリビード論が、「喪とメランコリー」においてもほとんど変わらず適用されていることを明らかにし、草稿 G のリビード論的意義を示すことをここでは目指す。

草稿 G の最終章で取り上げられた「欲動貧困

化」は、論稿「喪とメランコリー」では、「自我の貧困化」と言い直されており、また、「心的なものにおける回収」は、論稿「喪とメランコリー」では、「対抗備給」という概念を用いて表現されている。さらに、草稿 G において論じられている「内的失血」や「傷」というイメージは、「喪とメランコリー」における以下のような描写とほぼ一致するものである⁵⁹⁾。

メランコリーのコンプレクスは、開いた傷口のように振る舞い、あらゆる方面から備給エネルギーを自分自身に引き寄せ（これは転移神経症においては「対抗備給」と呼ばれたものであるが）、完璧に貧困化するに至るまで自我を空にする⁶⁰⁾。（括弧内原著）

ここにおける「開いた傷口」は、論稿「喪とメランコリー」におけるさらに別のフロイトの比喻を思い起こさせる。それは、「その対象の影が自我にさした⁶¹⁾」というものである。その対象とは、愛の対象のことであり、その対象の影とは、メランコリーのコンプレクスのことだと思われる。そのコンプレクスにリビードが備給され、自我を貧困化させるのである。このことは、草稿 G の「メランコリーの本質は、リビードの喪失についての喪にある」という II の公式に当てはまる。そしてまた上述のようなリビード備給は、草稿 G で鍵概念となっていた「憧憬」、すなわち「心的な愛の緊張」と似ており、この緊張の蓄積が不均等な興奮亢進につながることで、他の脳内の機能を傷害し、心的制止が起こると考えられる。

次に躁病におけるリビードの動きも見て行きたい。草稿 G の最終章では「溢れ出る興奮がすべての連合したニューロンに伝達される躁病」という記述があったが、これは「喪とメランコリー」の以下の箇所に相当すると考えられる。

さしあたり拘束されていた備給が、メランコリーの作業の終了後、自由になり、躁病を引き起こすようになるが、その備給の蓄積はナルシズムへのリビードの退行と関連があるに違いない⁶²⁾。

ここにおいて躁病の機制におけるリビドの動きと量が見て取れるが、それらは草稿 G と「喪とメランコリー」において似通っている。しかし、ここで問題となるのはナルシズムへのリビドの退行である。草稿 G における「憧憬」の状態、心的な性の緊張（リビド）が蓄積され鬱滞する状態は、自我にすべてのリビドが引き戻される二次的ナルシズムの状態に似ているが、それはリビド経済論的に見たときにのみ可能となる類似性である。草稿 G では、「喪とメランコリー」において重要となる、愛の対象を自我の中に再建する「ナルシスの同一化」に寄与するような概念はまったく見出せないし、同一化された対象をアンビヴァレンツの影響によって責めさいなむサディズムについても語られていない。また、自我を対象と見なし批判的に評価する審級（批判的審級）の原型となるような概念も見出せない。すなわち、草稿 G においては、リビド経済論によって神経学的にメランコリーの機制が説明されているのみであり、「喪とメランコリー」で語られているような対象関係が抜け落ちている。この意味においては、序で取り上げたストレイチの草稿 G に対する「とくに実り多きものではなかった」という見解は当を得ていると思われる。

しかしながら、本稿での考察が示してきたように、リビド経済論的に見ると、草稿 G と論稿「喪とメランコリー」、両者におけるメランコリーに対するフロイトの基本的見解はほとんど一致しているのである。両者におよそ 20 年という歳月の隔たりがあろうとも、そしてまたメランコリーの疾病分類や対象関係に相違があろうとも、そのリビド論は一貫しており、そのことをわれわれは看過してはならないと思われる。ナルシズム概念の導入という大きな転換が精神分析にもたらされた直後の論稿「喪とメランコリー」において、その新たな概念を取り入れてメランコリーが論じられているにもかかわらず、メランコリーにおけるリビド論にはほとんど変更が加えられていないのである。この理由を明らかにすることは残念ながら本稿では成し得なかったが、これを解明するためにも草稿 G は今後、見直されてしかるべきものであると言えるだろう。

注

- 1) Entwurf einer Psychologie (1950 [1895]). In: *Gesammelte Werke*, Nachtragsband, Texte aus den Jahren 1885–1938, Angela Richards (Hgg.). Frankfurt am Main 1987, S. 373–486. 以下, G. W., Nb. と略記する。
- 2) 代表的な文献は以下のものである。プリグラム, K. H. / ギル, M. M. 『フロイト草稿の再評価 現代認知理論と神経心理学への序文』安野英紀訳, 金剛出版, 1988 年。
- 3) 最近の文献では以下のものが挙げられる。衣笠隆幸『『科学的心理学草稿』——忘れ去られ数奇な運命をたどった難解で異色の論文』, 西園昌久監修, 北山修編集代表『現代フロイト読本』第 1 巻, みすず書房, 2008 年, 49–72 頁。竹中均「フロイト『心理学草案』の可能性——快原理の二つの解釈——」『思想』No. 1010, 2008 年, 6 月号, 64–86 頁。
- 4) *Briefe an Wilhelm Fliess 1887–1904*. Jeffrey M. Masson (Hgg.). Frankfurt am Main 1986 (以下 *Briefe an Fliess* と略記) には、編者による草稿分類のためのアルファベットが付されている。草稿「メランコリー」に当てられたアルファベットは G である。この草稿は日付が記されていないので起草された正確な年月日はわからないが封筒の消印は 1895 年 1 月 7 日である。
- 5) *Trauer und Melancholie* (1917 [1915]). In: *Gesammelte Werke*, Bd. X, Anna Freud et al. (Hgg.). London 1946, S. 427–446. 以下 *Gesammelte Werke* は G. W. と略記する。ここでは *Trauer* を「喪」と訳しているが、*Trauer* は「喪」という訳語以外に「悲哀」や「哀悼」などといった訳語が当てられることがある。精神分析の用語においては、*Trauer* は愛する対象を喪失した哀しみを意味し、その喪失感に重点が置かれるため「喪」と訳されることが多い。また、*Trauer* は死者を悼んで喪に服するという意味もある。
- 6) *Metapsychologische Ergänzung zur Traumlehre* (1916). In: G. W., Bd. X, S. 412 Anm.
- 7) *Studien über Hysterie* (1895). In: G. W., Bd. I, S. 75–312, G. W., Nb., S. 196–218, 221–312.
- 8) Cf. Jones, Ernest: *Sigmund Freud. Life and Work. Vol. 1. The Formative Years and the Great Discoveries 1856–1900*. London 1953, p. 356–359.
- 9) *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud*, vol. XIV, tr. under the general editorship of James Strachey in collaboration with Anna Freud, assisted by Alix Strachey and Alan Tyson. London 1957, p. 239.
- 10) リビド経済論とは、リビドを可動性のある増減可能な量的エネルギーとして捉える見方のことである。
- 11) Vgl. *Briefe an Fliess*, S. 96 f.
- 12) Vgl. a. a. O., S. 70.
- 13) Vgl. a. a. O., S. 73.

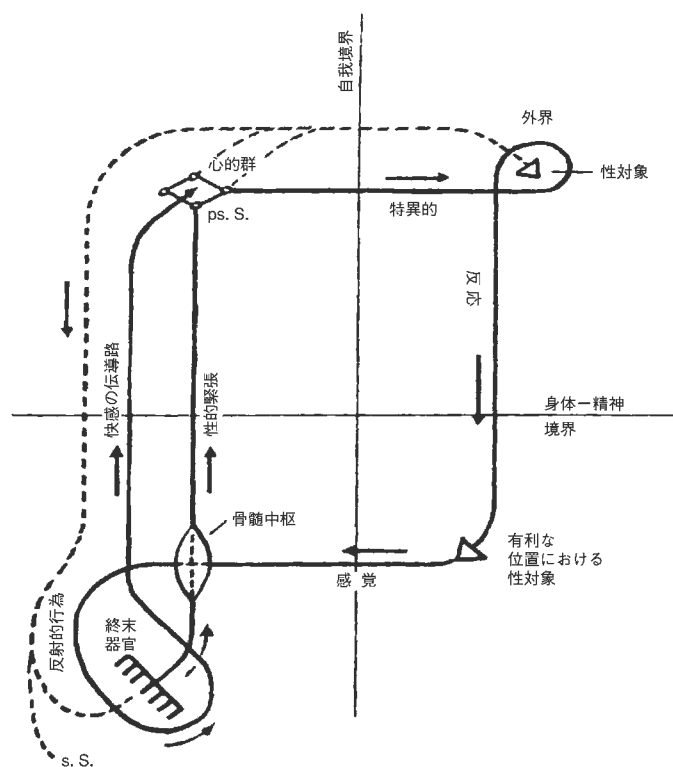
- 14) Vgl. Die Sexualität in der Ätiologie der Neurosen (1898). In: *G. W.*, Bd. I, S. 509 ff.
- 15) Vgl. *Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse* (1916–1917 [1915–1917]). In: *G. W.*, Bd. XI, S. 427–446.
- 16) Vgl. Psychoanalytische Bemerkungen über einen autobiographisch beschriebenen Fall von Paranoia (Dementia paranoides) (1911). In: *G. W.*, Bd. VIII, S. 311–316.
- 17) Vgl. Zur Einführung des Narzissmus (1914). In: *G. W.*, Bd. X, S. 138–140.
- 18) Trauer und Melancholie (1917 [1915]). In: *G. W.*, Bd. X, S. 436. 本稿におけるフロイトのテキストの引用は、日本語版の選集、著作集、全集を参照し、適宜訳語に変更を加えた。
- 19) 超自我はエスと外界からの影響を一つにまとめるものである。超自我と自我との葛藤によって起こるメランコリーは、ある意味で神経症でも精神病でもあるとも言えるのではないだろうか。
- 20) Vgl. *Neurose und Psychose* (1924). In: *G. W.*, Bd. XIII, S. 390.
- 21) 以下の引用における訳語は基本的に『フロイト フリースへの手紙 1887–1904』の河田晃訳に従うものであるが、適宜訳語に変更を加えた。
- 22) *Briefe an Fliess*, S. 97 f.
- 23) Vgl. Über die Berechtigung von der Neuras-thenie — einen bestimmten Symptomenkomplex als „Angst-Neurose“ abzutrennen (1895 [1894]). In: *G. W.*, Bd. I, S. 328.
- 24) Vgl. *Briefe an Fliess*, S. 74 f.
- 25) Vgl. a. a. O., S. 85–87.
- 26) Vgl. a. a. O., S. 73 f.
- 27) Vgl. Über die Berechtigung von der Neuras-thenie — einen bestimmten Symptomenkomplex als „Angst-Neurose“ abzutrennen (1895 [1894]). In: *G. W.*, Bd. I, S. 328.
- 28) Vgl. *G. W.*, Nb., S. 258 f.
- 29) *Triebe und Triebchicksale* (1915). In: *G. W.*, Bd. X, S. 214.
- 30) 付録参照。おそらくこの性図式はフロイトが考案したものと思われるが、フリースの書簡においてこの図式に言及しているものはこの草稿以外に一通しかない。それは1894年（推定）の草稿D「大神経症の病因と理論について」である。
- 31) Vgl. *G. W.*, Nb., S. 263 f. 具体的な例を挙げると、口紅を見て恋人との口づけを想い出し、その時の喜びも同時に想い出されると、その喜びにまつわるいろいろな表象が意識に上り、その日の出来事が連想されるというような状態のことだと思われる。
- 32) マスターベーションが性生活において有害なものであるということをフロイトはこの時期いたるところで主張していた。その主張の代表的なものは以下のものである。Manuskript B: Die Ätiologie der Neurosen (1893). In: *Briefe an Fliess*, S. 29 ff. Die Sexualität in der Ätiologie der Neurosen (1898). In: *G. W.*, Bd. I, S. 508.
- 33) Vgl. *Briefe an Fliess*, S. 98.
- 34) Vgl. a. a. O., S. 75.
- 35) フロイトは、中断性交 (Coitus interruptus) と体外射精 (äusserlicher Koitus) をしばしば同じ意味で用いていたが、区別して用いている記述もある。Vgl. a. a. O., S. 29.
- 36) Vgl. a. a. O., S. 73 ff.
- 37) Vgl. a. a. O., S. 98, 100.
- 38) a. a. O., S. 100.
- 39) *Hemmung, Symptom und Angst* (1926 [1925]). In: *G. W.*, Bd. XIV, S. 111–205.
- 40) *Die Abwehr — Neuropsychosen* (1894). In: *G. W.*, Bd. I, S. 66.
- 41) 相容れない表象から自由になった情動が結びつくことができる表象は、このような性質を持つ情動と統合できるものか、あるいはもとの相容れない表象と特定の関係を持っており、それゆえこの表象の代理となることができるものである。たとえば、その性的な由来を想起しようとしなくなり、そのため自由になった不安の情動が、雷雨や暗闇などの人間に共通する根源的な恐怖と結びつけられたりするか、または性的なものを連想させる排尿や排便という行為に結び付けられたりする。Vgl. a. a. O., S. 68.
- 42) Vgl. a. a. O., S. 68 f.
- 43) a. a. O., S. 68.
- 44) Vgl. a. a. O., S. 69.
- 45) Vgl. a. a. O., S. 67.
- 46) 付録の性図式を参照されたい。
- 47) *Briefe an Fliess*, S. 97 f. この引用における訳語は基本的に『フロイト フリースへの手紙 1887–1904』の河田晃訳に従うものであるが、一部訳し間違いが見られたので訂正し、さらに適宜訳語に変更を加えた。
- 48) ブロイアーは『ヒステリー研究』初版において葛藤による連想の流れの制止の例として良心の呵責を挙げている。良心の呵責とは、道徳的な表象（観念）を教え込まれることによって、その人の体に染みついた強固なコンプレックス（表象複合）と、それとは相容れない自分自身の行いや考えの想起との間の葛藤である。宗教教育によってこの種の葛藤が生じることが非常に多い。より具体的な例を挙げると、道徳的に敏感な思春期においてマスターベーションをしたり、あるいはまた、性的な感覚や表象が初めて浮かび上がってきたりするだけで、道徳的純潔という擦り込まれた表象との間で葛藤が生じる。この葛藤によって極度に高い興奮状態が作り出されるのである。Vgl. *G. W.*, Nb., S. 268f.
- 49) Vgl. *Briefe an Fliess*, S. 73.
- 50) Vgl. a. a. O., S. 73.
- 51) Vgl. *G. W.*, Nb., S. 251–257.
- 52) Vgl. a. a. O., S. 251–258.
- 53) 憧憬を抱く女性の具体的な例は、草稿Jにおいて見られる。ここでは、フロイトの臨床例P. J. 夫人が挙げられている。彼女は結婚してすぐに単身赴任によって夫と離れ離れで生活せねばならな

くなり、夫に対する想いを募らせていた。そんなある日、『カルメン』を歌っていると、自分は気が狂ってしまうのではないかという不安に満ちた強迫観念に襲われた。彼女はじつはこのとき、『カルメン』の歌から呼び起こされた自分の性的な欲求が意識に進入してきそうになり、防衛を働かせ、狂気に陥る不安という誤った結び付きをなし、性的欲求を無意識へと押しやったのである。フロイトは、夫との性的な愛撫への憧憬を彼女自身が認めないことが不安の原因になっているというのを彼女に告げた。Vgl. *Briefe an Fliess*, S. 161–163.

- 54) a. a. O., S. 73.
- 55) a. a. O., S. 102.
- 56) フロイトは「心理学草案」(1950 [1895])において神経系の興奮量の伝達の仕方を神経系の構成を用いて描写している。その描写によると、神経系は境界のはっきりした一様のニューロン群から成り立っている。それらのニューロンは異質の物質を媒体として接し合い、その末端はそれぞれ他の組織部分と接している。この組織部分との間でニューロンは、細胞突起を介して興奮を受容し、軸索を介してこの興奮を放出する。このことによって特定の伝導方向が設定される。Vgl. *G. W.*, Nb., S. 390.
- 57) Vgl. a. a. O., S. 390.
- 58) 憧憬、すなわち「心的な愛の緊張」が蓄積されるところにメランコリーが生じるというフロイトの見解を思い起こしていただきたい。Vgl. a. a. O., S. 73.
- 59) 「喪とメランコリー」における「傷口」の比喩がすでに草稿 G においても見られるということは、標準版英訳に収録されている「喪とメランコリー」の註 (P. 253) でもコフマンが編集した『フロイト & ラカン事典』のメランコリーの項目 (351–352 頁) でも指摘されているが、それらは簡単なものにとどまっており、詳述されていない。
- 60) *Trauer und Melancholie* (1917 [1915]). In: *G. W.*, Bd. X, S. 439 f.
- 61) „Der Schatten des Objekts fiel so auf das Ich“, a. a. O., S. 435.
- 62) a. a. O., S. 446.

引用文献

- Freud, Sigmund : *Die Abwehr-Neuropsychosen* (1894). In: *G. W.*, Bd. I, S. 57–74.
- *Über die Berechtigung von der Neurasthenie — einen bestimmten Symptomenkomplex als „Angst — Neurose“ abzutrennen* (1895 [1894]). In: *G. W.*, Bd. I, S. 313–342.
- *Studien über Hysterie* (1895). In: *G. W.*, Bd. I, S. 75–312, *G. W.*, Nb., S. 196–218, 221–312.
- *Die Sexualität in der Ätiologie der Neurosen* (1898). In: *G. W.*, Bd. I, S. 489–516.
- *Zur Einführung des Narzissmus* (1914). In: *G. W.*, Bd. X, S. 137–170.
- *Triebe und Triebchicksale* (1915). In: *G. W.*, Bd. X, S. 209–232.
- *Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse* (1916–1917 [1915–1917]). In: *G. W.*, Bd. XI.
- *Trauer und Melancholie* (1917 [1915]). In: *G. W.*, Bd. X, S. 427–446.
- *Neurose und Psychose* (1924). In: *G. W.*, Bd. XIII, S. 387–391.
- *Hemmung, Symptom und Angst* (1926 [1925]). In: *G. W.*, Bd. XIV, S. 111–205.
- *Entwurf einer Psychologie* (1950 [1895]). In: *G. W.*, Nb., S. 373–486.
- *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud*, vol. XIV, tr. under the general editorship of James Strachey in collaboration with Anna Freud, assisted by Alix Strachey and Alan Tyson. London 1957.
- *Briefe an Willhelm Fliess 1887–1904*. Jeffrey M. Masson (Hgg.). Frankfurt am Main 1986.
- Jones, Ernest : *Sigmund Freud. Life and Work*, vol. 1. *The Young Freud 1856–1900*. London 1953.
- 衣笠隆幸 『『科学的心理学草稿』——忘れ去られ数奇な運命をたどった難解で異色の論文』, 西園昌久監修, 北山修編集代表『現代フロイト読本』第1巻, みすず書房, 2008年, 49–72頁.
- 竹中均 「フロイト『心理学草案』の可能性——快原理の二つの解釈——」『思想』No. 1010, 2008年, 6月号, 64–86頁.
- プリグラム, K. H. / ギル, M. M. 『フロイト草稿の再評価 現代認知理論と神経心理学への序文』安野英紀訳, 金剛出版, 1988年.



性図式 — G. フィッターによる描き直し。

出所：フロイト，ジークムント『フロイト フリースへの手紙 1887-1904』河田晃訳，誠信書房，2001年，556頁より抜粋。

付録 性図式

Melancholie und frühe Form der Libidoökonomie Zur Bedeutung des freudischen Manuskripts G *Melancholie für die Libidotheorie*

Ayumi MATSUYAMA

Graduate School of Human and Environmental Studies,
Kyoto University, Kyoto, 606-8501 Japan

Zusammenfassung Ein frühes freudisches Manuskript, *Entwurf einer Psychologie* (1950 [1895]) wird höher eingeschätzt, dagegen klären sich andere frühe Manuskripte noch nicht auf. Der vorliegende Aufsatz beschäftigt sich, das Thema Melancholie beachtend, mit einem frühen Manuskript G *Melancholie* (1895). Dieses Manuskript steht allerdings bezüglich der ökonomischen Begründung der Libido im engen Zusammenhang mit der etwa 20 Jahre später metapsychologisch abgefassten Abhandlung *Trauer und Melancholie* (1917 [1915]). Durch den Vergleich beider genannten Werke wird die besondere Bedeutung des Manuskript G bei der psychoanalytischen Libidotheoriebildung in der vorliegenden Untersuchung betont.